

旅人（バックパッカー）が書き、旅人が読む、旅人のための旅ライフフリーペーパーマガジン

Brali

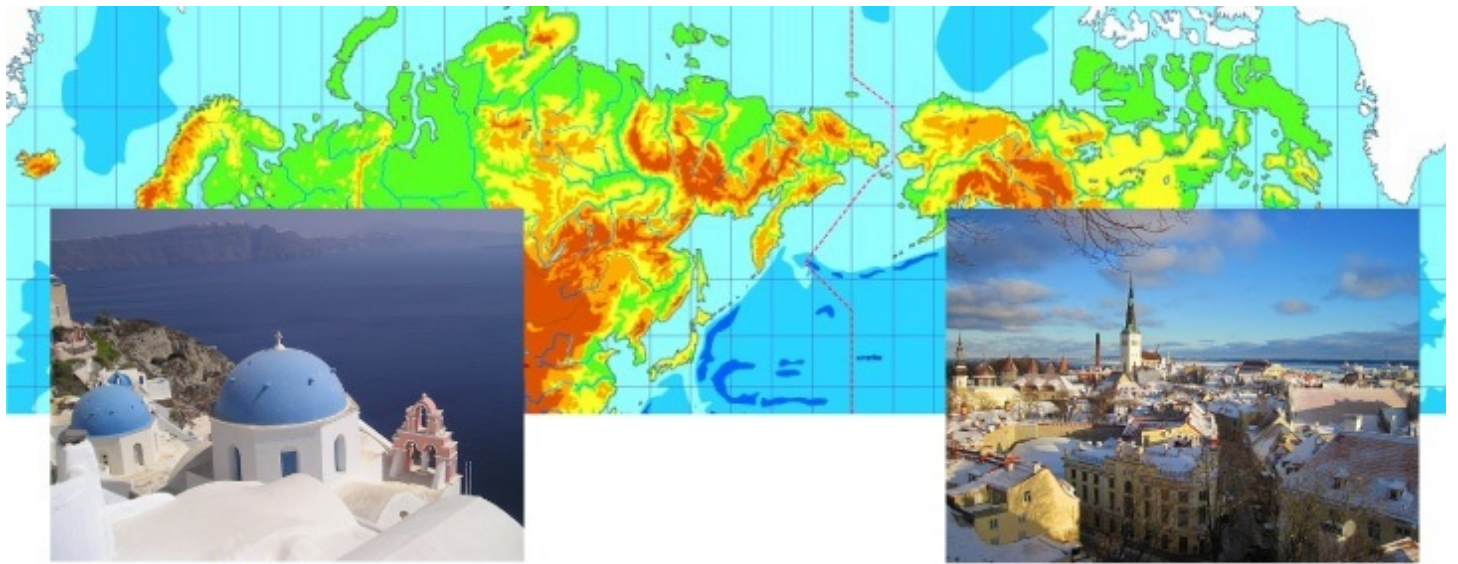
テーマ「遺したいモノ・コト マイ世界遺産」
年末年始弾丸バックパッカー／旅先の変な日本語
情熱さえあれば不可能なことはない／Chibirockの旅はくせもの
HANGOVER in the WORLD / 自炊派の手料理
旅人からの伝言 「特集中南米」
世界マイノリティ流儀／アジア漂流日記 他



CONTENTS

CONTENTS

- 年末年始弾丸バックパッカー
- テーマ「遺したいモノ・コト マイ世界遺産」
まさにカオス！ 奇祭と呼ばれる世界的な祭り！
情けない自分を記憶に残す
世界の海で海洋動物とスイミング
- 旅先の変な日本語
- 旅で使えるデジタルアプリ
- 情熱さえあれば不可能なことはない
- Chibirockの旅はくせもの
- HANGOVER in the WORLD
「トルコでビールを」
- 旅人からの伝言 「特集 中南米」
恐怖による緊張感と大自然による開放感
南米からの伝言
- トホホな話
- 自炊派の手料理「おいしいお手軽リゾット」
- 世界マイノリティ流儀
- アジア漂流日記
- 旅の便利グッズ
- 世界のパーキングメーター
- 作者・情報提供者一覧
- 編集後記
- 次号予告
- 記事募集



ギリシャ

北欧・バルト

✈️ 年末年始

弾丸

バックパッカー ✈️

そろそろ旅に出たいなあ〜と疼きを抑えられない。でも、仕事を辞めてまではなかなか旅には出られない。そんな方にとって年末年始は年間を通じて最大のチャンス到来かもしれない。年末年始休暇に弾丸旅行をするヒントを実際に旅した人達からいただいたので紹介しよう。ブリーフケースやハンドバッグをバックパックに変えて年末年始だけでもバックパッカーになってみないかな？



ケニア・タンザニア



クスコ・マチュピチュ・ウユニ

ご紹介するデータの中には数年前のものも含まれます。交通の便の有無、時間や料金などをご自身でご確認ください。またその地域の治安などは変化しますので、その都度ご確認の上ご計画ください。



クスコ・マチュピチュ・ウユニ

1日目：クスコ着(クスコ泊)

街全体が世界遺産のクスコ
訪れたときはお祭りをしていました

2日目：クスコ～マチュピチュ～クスコ～プーノ(バス泊)

言わずと知れた、世界遺産人気No.1の天空都市マチュピチュです。
死ぬまでには一度訪れたいところです。



3日目：プーノ(プーノ泊)

4日目：プーノ～ラパス(ラパス泊)

ボリビア最大の都市ラパス。富士山と同じ標高にあります。



5日目：ラパス～ウユニ(バス泊)

世界一広い塩湖のウユニ塩湖。
乾期でも十分美しいです

6日目：ウユニ～ラパス(バス泊)

7日目：ラパス～リマ(バス泊)

バスを3回乗り継いで32時間連続バスの中で過ごす。

ペルーの首都リマ。
歴史的な街並みが残っています。



※ 現地までは飛行機、全ての区間内はバスにて移動

■Writer&Photographer

ワールドハッカー

■Age

30歳

■Profile

元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://bit.ly/WorldHacks>



ギリシャ

1日目：ソフィア～テッサロニキ（夜行列車泊）

イスタンブールから8時ごろの飛行機でソフィアに。
21時ごろの列車でギリシアに向かいました。

2日目：テッサロニキ1日観光

世界遺産の街で遺跡、博物館等を観光。海岸線の夕
日がとてもきれいでした。

3日目：テッサロニキ～カランバカ

列車移動。世界遺産メテオラの修道院を周りました。

4日目：カランバカ→アテネ

列車移動。午前中前日見学できなかった修道院を
巡り、午後2時の列車でアテネに。

5日目：アテネ→サントリーニ島（船泊）

午前アクロポリスの丘を中心に観光。夜ピレウ
ス港から船でサントリーニ島へ。

6日目：サントリーニ島

午前島の先端のアクロティリ遺跡、午後夕日を堪能。

7日目：サントリーニ島→アテネ（飛行機移動）

8日目：アテネ→デルフィ→アテネ

日帰りで世界遺産デルフィに。（バス移動）

9日目：アテネ→イスタンブール

イスタンブールでトランジット8時間。ブルーモス
ク、アヤソフィア、マーケット等を見学。

※ 現地まで往復は飛行機



■情報提供者：大谷浩則

■Age：28歳

■Profile：

猪突猛進の超不器用旅人。2009年4月から423日の海外放浪を実行。来年再放浪計画中。

Blog:「ウィーリー 海外放浪・地球一周・地球探索 ～人生大満喫の旅～」

<http://ameblo.jp/hero23/>



ケニア・タンザニア

1日目：ドーハで乗り換え、12:30ナイロビ着

2日目：ナクル湖国立公園とナイバシャ湖へ日帰りサファリ

サファリは、選べばもっと迫力のある光景に出会える自然公園もありますが、お手軽なナクル湖に

3日目：ナイロビ市内散策

クリスマスのため、教会でミサが行われ、正装した家族をたくさん見かけました。他方でビジネス街は閑散としており、閉まっている店も多く、治安の悪さで名をはせるナイロビですが、平和な祝日という印象でした。

4日目：ナイロビ～モシ（バス移動）

キリマンジャロが見られれば、とモシで一泊。

5日目：ダルエスサラーム

前日夕方には雲に隠れていたキリマンジャロを車窓から眺めながら、バスで9時間。

6日目：ザンジバル（フェリー移動）

ストーンタウン（世界遺産指定）を散策。

7日目：ストーンタウンを散歩

8日目：ストーンタウン～東海岸

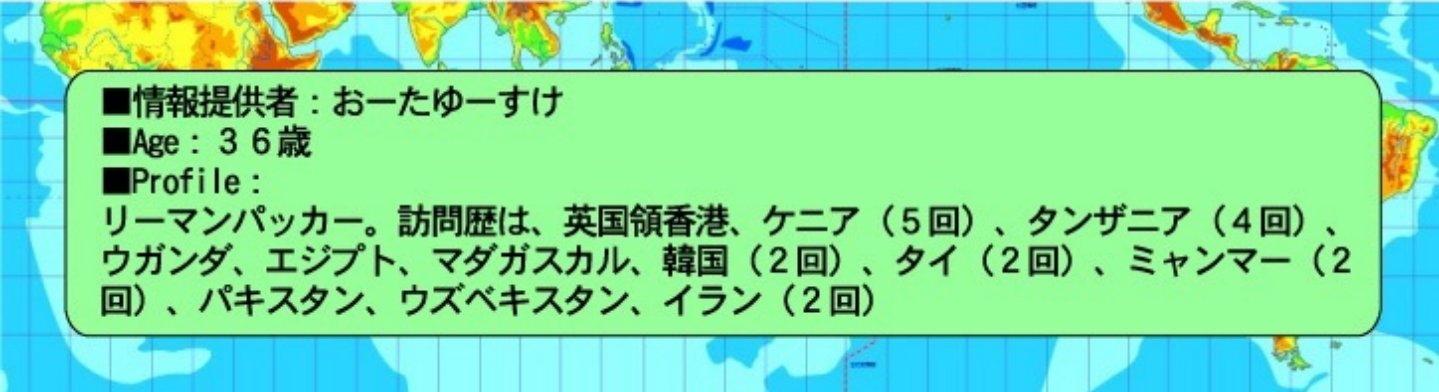
女性たちのまとうカンガという布の色が太陽の下であざやかに映える。

9日目～11日目：東海岸

村ではおおみそかとあって、ダウ船のコンテストが行われていました。

11日目：東海岸～ザンジバル空港

※ 現地まで往復は飛行機



■情報提供者：おーたゆーすけ

■Age：36歳

■Profile：

リーマンパッカー。訪問歴は、英国領香港、ケニア（5回）、タンザニア（4回）、ウガンダ、エジプト、マダガスカル、韓国（2回）、タイ（2回）、ミャンマー（2回）、パキスタン、ウズベキスタン、イラン（2回）



バルト・北欧

1日目：エストニアのタリン

旧市街に宿をとってお散歩。

2日目：タリン～フィンランドのヘルシンキ（フェリー移動）

フェリーで片道約2時間。カモメ食堂（トナカイのお肉も食べられる！）、北欧雑貨のお店散策。ヘルシンキ近くの郵便局にも、マリメッコなどの北欧ブランドやムーミン柄の梱包用雑貨が置いてあってかわいい☆



3日目：ヘルシンキ～タリン（フェリー移動）

4日目：タリン～ラトビアのリーガ（バス移動）

バスで約4時間。プレーメンから贈られたという、音楽隊の銅像あり（顔がこわくてとてもブサイク！笑）

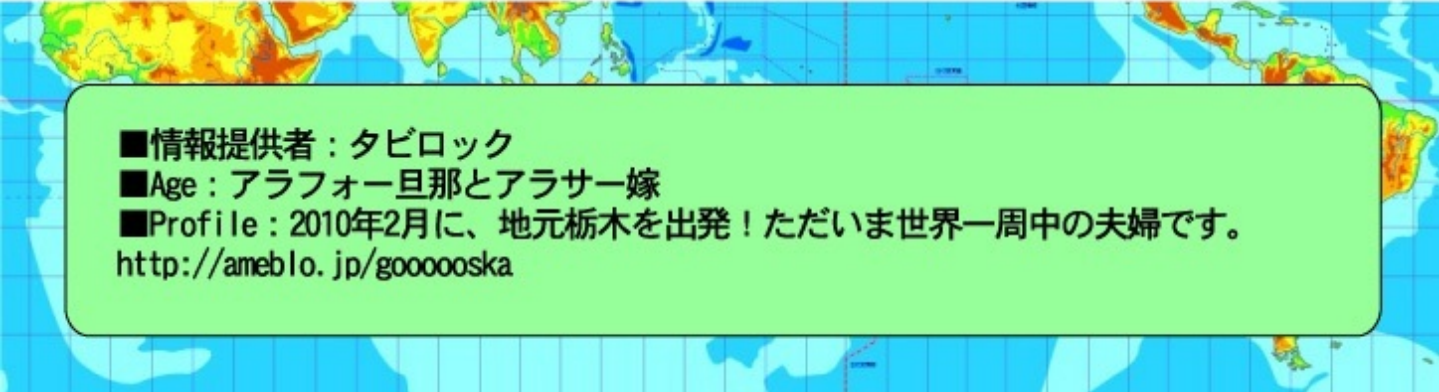
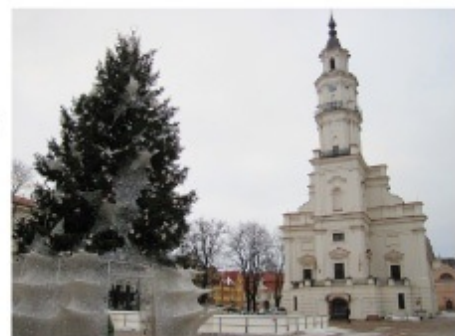
5日目：リーガ～リトアニアのカウナス

6日目～7日目：カウナス～リトアニアのヴィリニウス（電車移動）

カウナスの旧市街お散歩。杉原記念館（6000人のユダヤ人を救った東洋のシンドラー）。電車で1時間12分～1時間45分

8日目：リトアニア

ヴィリニウス旧市街お散歩。川沿いに、見つけると幸せになるという人魚の像がある。KGBの博物館。（拘置所??などとして使われてた所、水牢、処刑場などもあり）。ツェベリナイというリトアニア料理がおいしい。ジャガイモでできた生地の中にひき肉が入ってる、モチモチしてておいしい♪ジャガイモのパンケーキも◎。ヴィリニウス駅併設のレストランで食べました。



■情報提供者：タビロック

■Age：アラフォー旦那とアラサー嫁

■Profile：2010年2月に、地元栃木を出発！ただいま世界一周中の夫婦です。

<http://ameblo.jp/gooooooska>

(C)Yoshinao Okabe



だれが認めなくともワタシだけは認めるマイ世界遺産

【テーマ】

遺したいモノ、コト
マイ世界遺産

まさにカオス！ 奇祭と呼ばれる世界的な祭り！



■Writer&Photographer

岡部能直

■Age

33歳

■Profile

世界の絶景や世界遺産を中心に旅を続ける旅人。七大陸制覇の経験を生かし、世界各国についての旅コラムを執筆。『世界のどこかで何か叫ぶ・・・かもしれない。』<http://ameblo.jp/ok-be/>

横幅4～5m程しかない道は、その興奮を爆発させるのを待ちわびる数万人の人々で埋め尽くされ、異様な雰囲気包まれていた。「♪オ～レ～、オレオレオレ～」ところどころから湧き上がっては、オーディエンスを巻き込んだ大合唱、歓声、叫び声。道沿いに建つブルーシートで覆われた4階建て住居の上階からは、ホースで水が撒かれ続け、興奮しすぎた観衆の熱気を少しでも冷まそうとしてるようだ。いくら真夏のスペインとはいえ、日陰になりやすい小道では、冷たい水を掛けられ続けて、びちょびちょに水を吸い込んだシャツを着ていると凍えそうだ。僕は寒さゆえ、体を小刻みに震わせながらその瞬間を待っていた。

そう、そこは世界的に有名な祭り、La Tomatina（通称トマト祭り）の会場。みなトマトを一心不乱に投げるのをいまかいまかと心待ちにしているのだ。

そして午前11時、祭りの始まりを告げる号砲が轟いた。歓声は爆発し、トマトを求める叫びは悲鳴にも似ていた。僕らも「とまとお～、とまとお～」と雄叫びを上げた。数分後、遂に僕らの待ちわびた大量のトマトとそれを投げ入れる実行委員を載せた1台目の大型トラックが、通りの奥からゆっくりと近付いてくる。トラックに轢かれないように道の両サイドに、おしくら饅頭さながら避難せざるをえない。ただでさえ人口密度の多い道にいた人々が、限られた両サイドのスペースに移動するものだから、それは一度抜いたワインのコルクを再び押し込む作業ほど難儀だ。比較的背の高い僕でも両手を自分の体にギュウギュウとめり込ませないといけない程だから、女性なら窒息してもおかしくないかもしれない。四方八方から押され、自分の体の角度が傾いているのを感じながら、それでも体制を立て直せずにいると、頭に何か落ちてきた。かろうじて操作可能な頭を腕に向けると、地面にすら辿り着けずに僕の右腕に支えられたトマトが目についた。その大型トラックの荷台からトマトを撒いているのだった。

やっと待ちに待ったトマトが手に。この1個を握った時、アドレナリンが脳内に吹き出した。僕はこのために南米からスペインに飛んできたのだ。早速、軽く握り潰してトマトを前方へ投げる。といってもまだギュウギュウになった民衆にもみくちゃにされているので、セットポジションから振りかぶってオーバーハンドスローで投げるなんてことはできない。桜木花道よろしく、左手は添えるだけの精神でリングに放るような感覚だろうか。手首で投げたような気もする。興奮の絶頂にいたからか、今となってはうろ覚えだ。

もっとトマトをくれ。もっとトマトを投げてくれ。みんなの手が空へと伸びていく。が、次の瞬間トラックが通り過ぎ、人々はギュッと握ったスポンジが弾けるように空いた道路に押し出され、足元に転がるトマトを拾い一心不乱にトマトを投げる。視界は瞬く間に真っ赤に染まった。狂喜乱舞する数万人の人々により、そこはまさにカオスと呼ぶべき混沌とした状況だった。右から左へ、下から上へ、真っ赤な弾が乱れ飛ぶ。トマトから漏れ出る汁。まるで戦場。それでいて祭り。

欲しかった玩具を手にしてテンションの上がりきった子供のように、童心に戻った人々は足元に転がるトマトを掴み、思い思いの方向に無邪気に投げ、投げられては投げ返している。目の前の人々がトマトを投げる姿は、34年間の人生で目の当たりにしたことはない。その姿は傍から見ても滑稽でもあり、この祭りに参加した実感がまさに沸いてきてニヤニヤが止まらない。

そんな無防備だった僕への一発目の被弾は唇だった。これは「血が出たかっ」と思うほどの激痛だったが、次の瞬間には握っていたトマトを前方の何かに向かって投げ返していた。何に対して投げたのか、誰に対して投げたのかはわからない。楽しすぎて、興奮しすぎて、冷静さを完全に失ってしまったのかもしれない。本来なら軽く潰して投げるのがルールとなっているのだが、それでも硬いトマトが肩、背中、後頭部、顔にぶつくと結構な衝撃だ。でもそれがまたスイッチとなって人々を異常な世界へと誘うのだろう。僕らは騒ぎながら、日本からこの日のためにスペインに来た友人にウェルカムトマトをお見舞いし、当日誕生日を迎えた友人にはバースデートマトをプレゼントした。

が、もう現場は知り合いがなんだとか、国籍がなんだとか、人種がなんだとか、そんなことは関係がなかった。ちょっと古いが『そんなの関係ねえ！』だ。目に付いた奴が標的になり、目立った奴が標的にされる。そして、足元も真っ赤な海と化していた。固形で投げやすいトマトがなくなると、トマト皮の断片や実が蓄積した地面から、ドロドロのトマトペーストを両手で救い上げて投げるのだ。それどころか髪の毛に塗り込んだりもしていた。こんな状況では、僕の元々細い目を、十分に開けることすらままならない。僕のオデコが定位置となっていたゴーグルは、開始前から自分の熱気で曇り続け、目の前の視界を遮るばかりでその役目を果たしていなかったのだ。そして更なる希望を載せて、2台目の大型トラックがまた通りの奥からゆっくりゆっくりとやってきた……

実際、世界遺産に登録されていなくても、言葉を失うような自然や、鳥肌の立つような絶景、世界遺産以上に綺麗な建築物はたくさんあった。今日現在、世界遺産の場所で祭りが開かれることはあっても、祭り自体が世界遺産に登録されている物件はない。でもちょっと風変わりなクレイジーな奇祭を、ずっと後世に残したい『マイ世界遺産』に認定したい！



情けない自分を記憶に遺す

■Writer&Photographer

兼清俊太郎

■Age

22歳

■Profile

協賛金を募りながらアジアを旅する天然パーマな22歳の大学生。一昨年は100冊読書+書評、昨年はロンドンへ語学留学、今年アジア放浪の旅。来年は大学生活最後、留学と旅をもとにした本を出版したいけど未定。

<http://ameblo.jp/shun-travel/>

僕は、かつての情けない自分を記憶したい。人は自分にとって都合の悪い過去を忘却しようと試み、それが達成されると、あたかもその過去は無かったように自己を錯覚させる。しかし、僕はどうしてもそうしたくない。僕にとっての「遺したいモノ」とは、僕が抱いていた中国人に対する嫌悪であり、それを生む母体たる無知である。

初めて中国を訪れたのは高校2年生の頃。そのとき僕は、中国人という存在、彼らの習慣、態度、それらが全く理解できなかった。お土産屋で、お土産を買うために値段を交渉すると、僕がまだ子供だからって、会計の時になると交渉する以前の値段に戻す。狭い道路で向かい合う車、ほんの少しだけ向かいの車が横に移動すれば済む話なのに、向いの車の運転手はただ怒って、叫んでいる。

右翼だったり、ネット右翼だったり、きちんと政治的な考えを持った中国人嫌悪だったり、色々な反中感情を抱く日本人が居る。でも、僕は日本に溢れる中国人嫌悪の典型は「嫌われているから嫌う」パターンだと思う。自分を嫌う相手を愛すのはとても難しい。相手と同じように嫌うほうがとても簡単なこと。僕は中国人に触れた経験があったけど、その経験が中国人を嫌悪するに十分な経験とは言い難い。たった数日間の中国滞在で、13億人もの中国人を嫌悪できるだろうか、無理に決まっている。

たった数日間の片手で数えられる経験。しかし、数十年に渡り、彼らを嫌う経験をしたかのように、僕は中国人にとてもうんざりした。言ってしまうえば、こいつらは嫌いだと思った。その頃の僕は、そういう感情を抱く原因は僕にはなく、完全に中国人側にあると信じて止まなかった。けれど、中国を旅してみて、僕にこそ彼らを嫌う原因があったのだと強く感じた。



僕は中国を初めて「旅する」。そこには自分の足で見る世界が無限に広がっている。観光ガイドに連れられて見る、決まりきった景色ではない。決められた景色は無い、自分で能動的に動いて見る景色である。僕は常々思う、自分自身が暗に求めているモノ、それを見ようとするために旅をしているのかもしれない。中国でもそうだ、僕は自分の中国人嫌悪を変えたかったに違いない。だから、それを変える可能性のある地を旅し、人々と出会い、僕は変わっていった。

僕は、インド、ネパール、ベトナム、カンボジア、タイ、ラオス、その次に中国を訪れた。それらの国で、僕は日本以外の国でどのように振舞い、生きるべきかを学んだ。それは小学生の頃には学んでいるだろう、ある文句に集約されている。「郷に入れば郷に従え」。その文句を僕はこの旅でとことん実践した。「郷に従え」とは、その国の風習に従う、ということだ。それはどうすれば可能か、日本の常識を捨てることだと僕は思う。



僕は日本の常識を捨て去って旅をした。インドでは左手で自分のおしりを拭いて、右手でご飯を食べる。東南アジアではホースから出る水でお尻を洗って、路上で衛生状態がよろしいとは思えないご飯を食べる。どこの宿も日本ではありえないくらい汚く、どこの料理屋のキッチンもありえないくらい汚い。日本の常識を持ったまま旅をすれば、僕は高級料理屋でしか食事が出来ない。高級ホテルでしか宿泊が出来ない。日本の常識を捨て去ることは、僕には必要なことだった。

日本の常識を持たずに訪れた中国は、5年前に見た中国とはまるで異なっていた。言葉の通り、景色は自転車大国が電動バイク大国になっていた。でも、僕が言いたいのは、僕の心の中に映る中国という景色のこと。僕の心の中に日本の常識を宿らせなかったから見る事ができた景色のこと。僕はその景色を遺したいと強く思った。



僕はインスタントカメラで中国の景色を撮った。被写体は、日本ではあまり見られなくて、中国に溢れている「中国らしい」と僕が思える景色。つまりは、僕が思う「中国」という存在。例えば、想像以上に恋愛表現がオープンな中国人カップルだったり、暑くてTシャツを捲り上げてお腹を出すおじさんだったり、客引きが迷惑なバイクタクシーだったり。でも、僕は日本人が嫌う「中国の何か」も肯定的に1つの文化として見たいと思った。例えば、どこでもタバコを吸う中国人だったり、どこでもゴミを捨てる中国人だったり、どこでも痰を吐く中国人だったり。それらは日本人には顔をしかめたくなるほど不愉快なこと。でも、日本の常識を持たずにそれらを見れば、それほど不愉快にも思わなくなった。

僕が撮った写真を中国人に見せたら、「中国のこと嫌いなの？」って言われるかもしれない。でも僕はそれらの中国の景色を嫌悪していた、かつての僕が嫌い。一般的に日本人が嫌う中国の景色を肯定的に認識することが、僕にとって大切なこと。綺麗な中国の風景だけを撮って、「中国、大好き！」と言うのは僕にとって偽りに他ならないから。そして、それを撮り、ブログで伝えることは僕にとって興味深い実験。僕は、僕が遺したいと思った自分自身の変化を言葉とインスタントカメラで撮った写真で伝える。

きっと、かつての僕と同じように中国人が嫌いな人が日本には沢山居るだろう。でも彼らは具体的に中国人の誰かが嫌いなわけではない。触れたことが無い相手を嫌いになるのはとても悲しい。更に悲しいことにそれは負の連鎖を生んでしまう。僕は彼らの心に少しでも風を吹かせたい。



■Writer&Photographer

96 Happy World Journey ゆーじ & ありさ

■Age

30歳代

■Profile

2010年3月から夫婦で世界一周へ。ホームページでは旅の日記、写真、動画、特集ページなどを通して、地球の美しさと旅のワクワクを発信中。96Happy World Journey

<http://96happyworldjourney.web.fc2.com/>

夫婦で念願の世界一周に旅立つにあたって、どうしても成し遂げなかった夢が、野生のイルカと泳ぐという事だった。世界をひと周りすれば、いつかイルカと泳げるチャンスがあるかもしれない。そう思いながら、海の近くの街に滞在する時はいつもイルカツアーを探した。というのも、イルカ以外の野生の海洋動物と一緒に泳ぐ事ができるツアーがある事を知らなかったのだ。

ところが、イルカツアーを求めて海辺の街を旅していると、様々な海洋動物とシュノーケリングで泳げる事を知った。どの海洋動物とどの辺りの海で泳げるかというのはある程度決まっていて、シーズンを外さなければ、かなり高い確率で一緒に泳ぐことができる事も分かった。



こうして、世界の海で、海洋動物とスイミングするという念願が叶っていった。一緒に泳いだ海洋動物は、どれもが愛らしく、夢中にさせてくれた。

最初に出会ったのは、ジンベエザメ。メキシコのカンクンを訪れた時、カンクン北部にあるオルボッシュ島でジンベエザメと一緒に泳ぐことができるという情報を手に入れた。バスと船を乗り継いでその島に向かった後、早速ジンベエザメと一緒に泳げるというツアーに参加した。ジ

ンベエザメを探して2時間くらい船に揺られ、水面に黒っぽい大きな影が見えた時、船頭さんが海に飛び込むよう合図する。海中には、いきなり目の前で、青い身体に白い水玉模様の大きな巨体がゆったりと泳いでいた。大きな口にゴォォっと水が吸い込まれていく。

初めて海の中で大型の海洋動物と泳いだ時の感動は、言葉で表すのが難しい。もう、胸がいっぱいになって、無我夢中だった。できることなら彼らに追いついて行って、ぎゅっとハグしたい。あなたに夢中だと伝えたい。そんな気持ちに駆られた。

次に出会ったのは、マナティ。ベリーズのキーカーカー島を訪れた7月末は、ちょうどマナティが近海にやってくるシーズンで、多くの人が目を輝かせながらシュノーケリングツアーから帰ってくるのを目にした。参加したツアーで運良く見ることができたマナティは、灰色のずんぐりむっくり体型。じっと見ていると、お尻から大きな泡を連発。お、おなら??しばらくすると、水面から下を覗いている私達に気が付いて、好奇心旺盛な表情でじっと見返してきた。手を振ってみると、興味を示してぐんと近づいてきて、ふと進路を変えて泳ぎ去っていった。私達を不思議そうに見つめたあの愛らしい表情は忘れられない。

エクアドル、ガラパゴス諸島の無人島・ティントウレアス島へのシュノーケリングツアーで出会ったのは、アシカだった。ガラパゴス近海は、南極からの寒流が流れているので、水温が冷たい。船から海に飛び込んだ瞬間、水温の冷たさにびっくりしたけど、真下にいるアシカを見たたん、水温なんてどうでもよくなっていた。アシカは、こちらを見上げて、くるくる旋回していた。好奇心いっばいに目をくりくりさせ、少し泳いでは戻ってきてこちらを覗き込む。しばらく一緒に泳ぐと、波の強い岩場に向かって消えていった。ああ、夢みたい！アシカが去っていった方角を眺めながら、しばし茫然としてしまった。



野生のイルカと泳ぐという夢が叶ったのは、旅も一年を過ぎ、六大陸目のアフリカに足を踏み入れた時だった。タンザニアのザンジバル島の宿で、ツアー一覧を見ていた時にイルカツアーがあることを知り、即刻申し込んだ。その日は、非常に運がよかったようで、海に飛び込む度に約30頭のイルカの群れと一緒に泳ぐことができた。群れにはチビの赤ちゃんイルカもいて、こちらに興味を持って横目で見ながら泳ぐうちに、お母さんイルカに遅れをとって、必死で追いついていた。別の群れは、キュインキュイ〜ンと歌を歌っていた。

イルカの声が水中で共鳴して、その中を、ゆったりと流れるようにイルカは泳いでいた。一箇所で遊んでいる時はいいのだけど、いったん泳ぎ出すと、イルカはかなり速く動く。「一生懸命

泳がないと置いていかれそう」と思ったその時、一頭のイルカが群れから離れ、私の泳ぎに合わせてゆっくり泳いでくれた。驚きと感動が入り混じって、感謝の気持ちでいっぱいになった。そのイルカは、しばらく一緒に泳いだ後、「じゃあもう行くね～」というかのように、ずっと群れの方に戻っていった。

ジンベエザメ、マナティ、アシカ、イルカ。どの海洋動物と泳いだ時も、初めてジンベエザメと泳いだ時と変わらず、感動で胸がはりさけそうだった。彼らは、私達を見た時、言葉ではない何かでコミュニケーションをとろうとしてくれた。こちらに興味を持って、いつも受け入れてくれた。その優しさが、感動で胸をいっぱいにするのだと思う。

今、この瞬間も海の中では全く別の世界が動いている。そう思うと、地球の持つ多様性に改めて気づかされる。大海原を遊び場にしている野生の海洋動物。今後も、アンテナを張っていれば、また彼らと会える気がする。次は、どの海で、どの動物と出会えるのだろう。想像するだけでワクワクが止まらない。

日本語



旅先の

海外の旅先で見かける、どう見ても変な日本語。看板やメニュー、商品やチラシに至るまで。笑わせてくれる「変な日本語」をTwitterで集めて見ました。



キング・オブ・ザ・変な日本語の「極度乾燥」NYシーポートにて
<http://twitter.com/LALAxoxo13w>



よく見ると、誰か手直ししてる。正しい日本語を教える親切心か？
<http://twitter.com/lafragoraagla>



チヂミ以外は、何が出てくるかわからないので、意外と楽しめる
かもしれませんね。釜山の屋台。 <http://twitter.com/mohmadhiro>



「声を出して読んでみたい日本語メニュー」に推薦したいです。インドにて。
<http://twitter.com/okabe77>

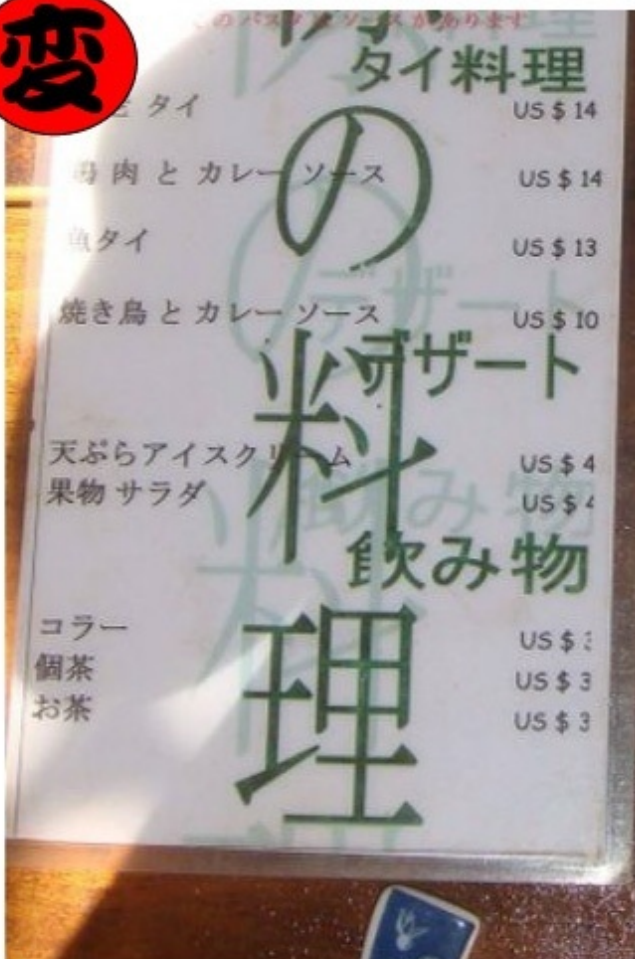
変



惜しい日本語って結構ありますよね。
カタカナで、「シ」と「ツ」とか「ソ」と「ン」とか「テ」と「ラ」とか。台湾。

<http://twitter.com/ara30ujn>

変



「コーラ」に「個茶」。ギリギリ予測はできますが。
チリはイスラデパスクア(イースター島)
<http://twitter.com/gackymr>

変



「オムライス」って長さんさんじゃないんだから「オイッサー」って。インド。

<http://twitter.com/okabe77>

変



難解な日本語「5つ星クラスの経験を冷却」。どうしたかったんでしょう。マレーシア。
<http://twitter.com/amdathlon0816>

変



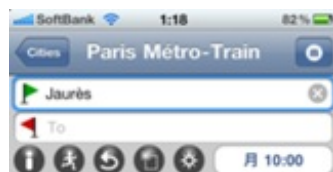
「小さい考えは滑る」。なんだか若手芸人に対する教訓のような、シロウトの行き当たりぱったりのダジャレに対する忠告のような。中国。
<http://twitter.com/chibirock>

変



もう、どんな料理が出てきても驚きません。「様式によってははずきが蒸気を発した」。同僚の鈴木さんが興奮しすぎたのかと思った。クアラルンプールでのメニュー。
<http://twitter.com/KanataniSatoru>

MetrO



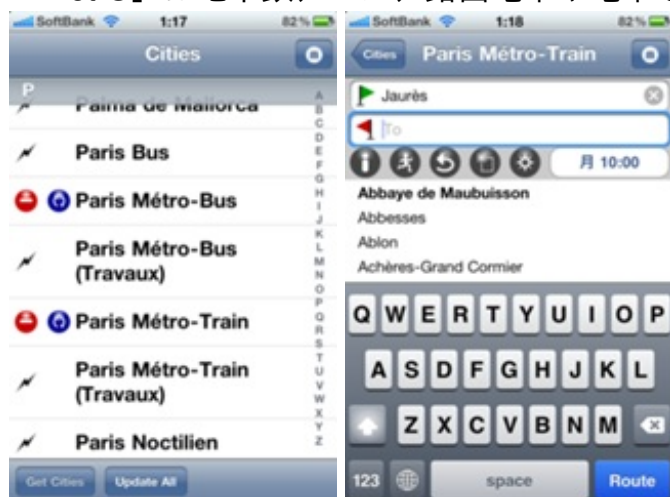
Copyright Kinevia SARL © 1997-2011
<http://metro.nanika.net>



海外に出て宿、食事と同様に重要なのが移動の問題。海外では公共交通機関は遅れることも度々あるものの、どのルートでどれくらいの所要時間がかかるか分かっていると、旅最中での行動予定が立てやすいですね。また旅の前に計画を立てる時にも有効かもしれません。

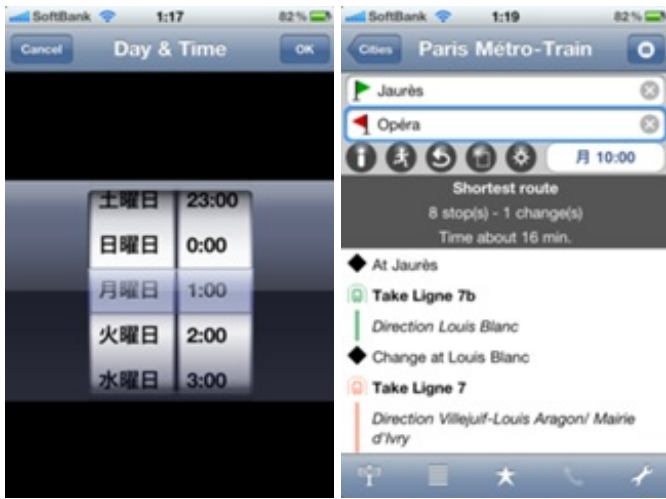
今回ご紹介するのは毎度のとおり無料のアプリ、「MetrO」。

「MetrO」は地下鉄、バス、路面電車や電車などの移動のルートや所要時間を検索できます。



使い方は簡単。

- ①「Cities」のページで利用する都市を選択します。
- ②緑フラッグの上の枠に出発地点を入力または下部のスクロールから選択
- ③同じように赤いフラッグの下枠に到着地点を入力します。
- ④その下の並ぶアイコンの右側の曜日と時間をタップするとスクロールで選択できます。
- ⑤アイコンの左から2番目の人型のアイコンをタップします。
- ⑥すると上部に乗り換え回数と駅やバス停の数と所要時間、下部にはルートを表示。



全て英語表示のアプリですが、そんなに難しくないので感覚的に使うことができますので使ってみてください。

情熱 不可能

さえあれば
なことは
ない

第一部 冒険のはじまり

韓国青年の世界旅行記

■Writer & Photographer
ジョン・サンゲン(著)
芹川彩音 / 増山知香 (編集・翻訳)

■プロフィール
1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数4万を超えた。現在は日本で留学中。
<http://www.sanggen.com/>

■Writer & Photographer

ジョン・サンゲン(著)

芹川彩音／増山知香(編集・翻訳)

■プロフィール

1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数4万を超えた。現在は日本で留学中。

<http://www.sanggen.com/>

母が言うには、僕にはどうやら放浪癖があるらしい。確かに、間違っていない。僕の放浪癖の始まりは、今から15年前、つまり12歳のときまでさかのぼる。

僕は一人息子で、誰もが想像できる“模範的”な学生を目指し、優しい両親に温室の花のように育てられてきた。そんな僕が放浪癖があるとされるまでに変わるきっかけをもたらしたのは、他でもない両親であった。忘れもしない中学1年生の夏休みのこと。「サンゲン、この夏休みに、お前ひとりで全国縦断の旅をしてみるのはどうだい？」唐突なまでのその提案という名の父の問いかけは、僕の心になんともいえない暗雲のような、そしてその隙間からのぞく太陽の光のような、とにかくよくわからない感情を呼び起こした。「世界には自分の力で乗り越えなければいけないことが沢山あるんだよ。お前も、その世界に挑戦してみるといい。」続けざまに父が言う。最初は面を食らった僕も、暗雲の隙間の太陽の光が徐々に大きく、強くなって行くのを感じた。

その時の僕の複雑な感情は今でも理解することは難しいと思う。温室の花のように育てられてきた自分が、これ以上温室は必要ないということを証明したかったのだろうか。それとも、最近読んだ冒険ものの小説に載っていた言葉に触発された旅心が、僕を温室の外の世界に連れだそうとしたのか。

静かに「旅に出てみたい」と両親に告げ、その言葉の意味を自分の中で確認するように、たった一人の旅に出る決心を固めたのだった。しかし、幼く世間知らずな僕の一人旅が容易でないことは簡単に想像できた。そして多くの人が口を揃えて、世界は厳しく危険で、子供の僕が一人旅に出るのは無理だと言った。そんなこと、この僕が一番わかっている。いくら僕でも、一人旅をするうえで自分の身の回りの環境はすべて自分で作らなければならないということを知っていたからである。当たり前のことであるが、外の世界というのは太陽の光のさす暖かなガラス張りの部屋でも、適度な水と栄養を与えられるやわらかな土でもないのだ。

心配する両親と何度も旅のことについて話し合った。それは旅の交通手段や他人の家に泊めてもらうときの礼儀にはじまり、訪れる場所についての歴史、気をつけなければいけない事柄、そして一人旅をする意味など、話し出せばきりがなかった。たぶん、僕も両親も、そうやって心の底からとめどなく溢れてくる不安を少しでも軽くしたかったのだと思う。

そして一週間という時間が過ぎたとき、僕の旅立ちの日〈生まれて初めて外の世界に飛び出す瞬間〉がやってきたのだ。結局、一週間のあいだ、両親といくら話し合っても、不安な気持ちは尽きることはなかった。温室を飛び出す僕には、寝るところも、食べるものも、十分なお金も、何もなかった。

"もしかしら今日寝るところも無いかもしれない..."近いうちに直面するかもしれない厳しい現実のことを考えると、のどの奥がきゅっと締まるような、そんな感覚がした。そんな思いが顔に出ているのだろうか。僕が、もう後は一歩を踏み出すだけという時になって、父は微笑みながら口をひらいた。「世界を、人々を信じなさい。」強く、そして確信ある口調で父は言う。旅先で出会う風、雲、花、そして多数の人々、道端に転がる小さな石でさえも、そのすべてが僕の師匠になる、と。その言葉は僕の中で驚くほど素直に溶け込み、じわり、と心の中に広がった。世界で最も偉大なアドバイスであった。両親の言葉を胸に、僕は家の玄関を出る。自ら世界に向かう、最初の一歩だった。そして僕は、この旅で世界は美しいことを知るのである。

僕の旅の物語は韓国の最南端、最西端に位置する"地の果ての村"海南(ヘナム)から始まる。海南では、僕たち韓国人が南北分断の現実の中で生きていることを感じさせた。というのも、韓国という国を縦断するにあたって、最も南に行くのは簡単だったが、最も北へ行くことは出来なかったからである。この出来事は僕の中で南北統一に対する意識を大きく変えた。南北統一を教科書や政治雑誌の上だけでなく、この国に生きる生身の人間として考える機会となったのだ。

光州(クァンジュ)で、僕は1人の母親に出会った。その母親は5.18墓地の前で、息子の墓

を抱きながら涙を流していた。彼女は未だ根深く人々の心に傷をつける痛々しい歴史の中で生きていた。5.18についての知識がほとんどなかった当時の僕にとって、それはあまりの衝撃だった。幼い子どもを失った母親は、どんな心で生きていくのだろうと考えると、その悲しさが胸の中に深く染み込んでくるようであった。僕がこれまで書籍で学んだことと、実際に今僕が心で感じる現実には、明らかな距離があることを感じずにはいられなかった。

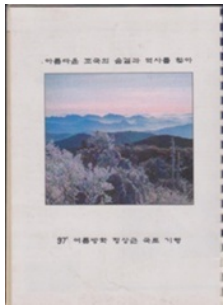
もちろん旅の途中での出会いはこれだけではない。僕の旅は、旅路で出会った多くの心優しい人たちの助けがあってこそ達成できたものだ。旅を始めたとき、僕のポケットには4万ウォン(約3,000円)しかなく、それは情けないことに交通費にも足りないお金で、僕の心を不安で埋め尽くすには十分な少なさだった。しかし、驚くことなかれ、旅行を終えて家に帰ってみると、僕のポケットの中のお金は10万ウォンに増えていたのだ。

僕のポケットは、お金の増える便利なポケットなどではない。僕は旅の途中で出会ったおばあさんたちに、幼い僕が一人で旅をしていることを驚かれることが度々あった。そして自分の孫ほどの歳の僕にお小遣いを渡してくれることも少なくなかったのである。彼女たちは一様に僕を孫のように可愛がってくれた。その優しく温かい心遣いだけで十分だった僕は、当然お金を受け取ることは遠慮してしたが、中には、僕が乗ったバスが去り際に窓からお金を投げ入れてくれる人までいたのだ。十分なお礼を言えないままにおばあさんは遠ざかり、こんなことなら遠慮せずに素直に受け取っておけば、ちゃんとお礼を言えたのに、と寂しい別れの気持ちとともに、もらったお金の模様を指先でなぞったものだった。

旅先の優しい人々はこの人たちだけではない。旅で出会う人々は僕を家に泊めることを許してくれる人がほとんどだったし、生まれて初めて出会ったお坊さんは、蓮の花の前で時間の経つのも忘れて人生の教えを受けさせてくれた。白色に桃色が柔らかく溶け込んだ蓮の花は、旅の色に染められて変わっていく僕の心のようにだと思った。

初めて会う人ばかりなのに、どこへ行っても歓迎してくれる人ばかりだった。僕は旅に出る時に両親からもらった言葉を心の中でつぶやいた。世界は素晴らしく、人々は温かい。

ここで僕の「旅ノート」について紹介したいと思う。実は旅に出る直前、一人旅立つ息子へと、両親から一冊の「旅ノート」を渡されていた。旅ノートの内容は、僕が旅の日記を書くための日数分の日記用紙、旅先で出会うであろう人々から僕へのメッセージを書いてもらうための用紙、そしてその人々に宛てられた両親からのメッセージも添えられていた。両親からのメッセージもここで紹介しておく。



..... 両親から旅先で息子が出会う人々に宛てた手紙

こんにちは。私はジョン・サングンの父、ジョン・ギョンソクと申します。
私の家族は1997年の春休みに、私の息子'ジョン・サングン'に自立心を養い、人と共に生きることを学ぶ機会を与えるため サングンを一人旅に送り出すことを決心しました。

今、まるでハトを放つような不安と共に、威風堂々と困難を切り抜けて帰ってくる息子の姿を待ち遠しく思う気持ちが混在しています。旅行中にお会いする多くの方の尊い話が、今はまだ未熟なサングンの良い勉強となり、この世に美しく芽を出すことを期待しています。

韓国国土の息吹の中で、サングンがこれまで生きてきた人生と、今から生きて行く人生の道に向き合い、この世の歴史の中に足を踏み入れる良い機会になれるよう、皆様の助けをお願いします。

サングンが一人旅で受ける多くの教えが、サングンが今から生きる人生のためになりますよう。
サングンのことを、どうぞ宜しく願い致します。



この両親のメッセージは、旅で出会った人々に、なぜ僕が旅をするのかを教えるのには十分だった。そしてそんな人々の胸を打つことにも。

この旅ノートは僕自信にも大きな変化をもたらした。

旅から戻り夏休みがあげた学校でのこと。学校の先生が僕を含めた生徒に夏休みの出来事を聞く機会があった。旅で数え切れない出会いと出来事を経験していた僕は、旅ノートを先生に見せたのだ。僕の旅に驚き、そして人々のメッセージに感動した先生は、僕の旅ノートを許可を取ったうえでコピーし、様々なひとに見せた。それがどんな経緯をたどったのかはわからないが、僕は新聞社に取材を受けることになったのだ。東亜日報、文化日報、京郷新聞など、30社以上の大手メディアからインタビューを受けるようになり、KBSなどの韓国最大の放送局も僕の旅に注目するという、思いもよらない結果になった。好奇心で始めた僕の最初の冒険は、僕のすべてを変えるきっかけになった。

好奇心から始まった5泊6日、4万ウォンの世界への挑戦であったが、この後も、僕の旅は続いた。旅は、単に僕に新しい風を運ぶだけではなかった。新しい風が吹くたびに、僕は僕の中で違う僕が生まれるのを感じた。それは新しい価値観であったり、新しい意志であったり、そして新しい行動や新しい感情までもが僕の中で生まれていった。

その一例としてあげるのは、最初の旅を終えたその年の中学1年生の冬休みのことである。僕のなかに芽生えた新しい考えのひとつに、“お金と労働の大切さを経験したいので、過酷な場所での仕事を通じて、初めて自分でお金を稼いでみたい”というものがあつた。それをそのまま、ある新聞社のインタビューで述べたところ、その記事を見た20を超える養鶏場から電話があり、その中でも特に僕の心を掴んだ場所で、僕は働くことになったのだ。

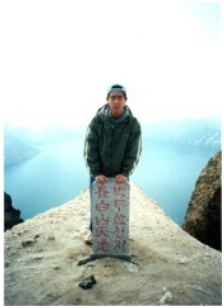
その養鶏場は知的障がい者と一緒に住み、有機農法で農場を営んでいた。経営者のおじさんから連絡をもらい、僕はそこで2週間働いた。その2週間は僕にまた、今まで知らなかった別の世界と出会わせた。僕自身が望んだこととはいえ、農場を営むということは本当に大変だった。最初の二日間はずっと鳥の糞の片付けで、途中で誤って足を滑らせ糞まみれの畑に倒れたこともあった。2週間滞る宿は、ネズミが出てくるような古い宿で、最初は寒さのせいで震えながら寝ることも出来なかった。しかし好みでない食材や味付けのせいで食べられなかった食べ物が、大変な労働の先には世界最高の食べ物となると感じる日が来ることは、そう遅くはなかった。

ある寒い冬の日、その日は一日中凍った土地を掘っていた。僕が一日かけて掘った穴は1mにも満たなかった。それでも手足はだるく、背中汗ばんでいるのに、指先は感覚がないほど冷え切っていて、1mが僕の精一杯だった。しかし翌日、おじさんはたった2時間で、僕の一日分よりも2倍も深い穴を掘った。おじさんは、僕にこれが“今のお前だ”と言った。僕の1日の1mと、おじさんの2時間の2mの間には、ただ茫漠とした時間の差が流れているように感じた。無力な僕にはまだまだ学ぶことがあり、進まなければならない時間があるのだと思った。

またある日朝早くに、おじさんは麦飯のおむすび1個と、一枚の地図を僕に渡した。おじさんは目的地の位置を説明した後、その場所まで歩いて行けと言った。さらに、おじさんは知的障害の人たちと自身の3歳の娘まで一緒に連れて行くよう言った。僕たちは夜遅くまで歩いた。30km以上の遠い道だった。道を一緒に歩くまで、僕は知的障がい者たちと同じ部屋を使いながらも、自分とは違う人だという偏見があつたが、僕はこの旅路で彼らと初めて一つになった。僕が大変なとき、彼らは僕を励まし、彼らが倒れそうになれば、僕は彼らを励ました。そうして僕たちは友人となり、兄弟となった。その時僕たちが歩んだ道は、6.25戦争（韓国戦争）当時の避難の道であり、僕たちが食べた麦飯一個も、当時と同じものだった。



その後も、僕の放浪癖は続いた。中学3年生の夏休みに行った東学農民運動の起こった地への無銭旅行や、青少年白頭山訪問プログラムに選出され、自分の誕生日に朝鮮半島で最も高い山である白頭山の頂上に登ったことなど、書き出していけば、きりが無いほどに僕には旅の思い出があり、思い出が増えるたびに、旅に対する特別な感情は強くなっていった。好奇心で始めた最初の旅は、その後の僕をすべて変えてくれた。そして僕は新しい場所で新しい人に会うことができる旅行を切望するようになった。僕の旅は、単に見聞を広げるものではなく、消極的で弱気な僕自身を変化させる唯一の出口になっていた。



しかし、その出口はすぐにふさがれることとなる。僕は受験生になったのだ。僕は今すぐにでもこの場所から飛び出したかったし、心の中で計画を立て、頭の片隅で、心臓の片隅で、常に旅に出ることを熱望していた。地球の反対側に、まだ見知らぬ土地に、別の世界に、行ってみたいと思っていた。しかし、そんな想いとは相反するように、現実には容易ではなかった。高校を卒業すれば、大学に進学しなければならなかったし、大学に進学した後は、兵役のため2年間は軍隊に行かなければならなかった。それは僕たちの社会が僕たちに要求する義務だった。

その頃の僕と友人たちは皆、大学進学という同じ目標のために走っていた。"旅"ということ、のんびりと考えていられるほど僕たちの入試は容易なものではなかった。そのときの僕たちにとって、やりたいことをするという事は、とても難しかった。僕は心の中で"いつかは"と叫んでみることもできなかった。しかし入試戦争に続く短い休憩、そしてすぐに続く、単身生活。"いつか"が一体いつやってくるのかを考えるだけで、いい知れない重く悲しい気持ちが心の奥底から溢れ出してくることもあった。

しかし、やりたいことがあるというのは僕の中で大きな力になった。学生時代は暇さえあれば、行ってみたい国に関連する本を読んで過ごしたし、軍隊での厳しい訓練と夜明けのつらい警戒勤務も、心の中に描いた世界地図を思い浮かべると不思議と辛さが消えていくようだった。旅に出る、その日を夢見て指折り数えて待つことだけで、僕の心は幸せに満ち溢れていった。

一見不可能にも思えることでも、最善を尽くして準備し、挑戦すれば何でも実現可能だという希望を持つようになった。旅は僕の考え方や価値観を底辺からひっくり返し、丸々変えてしまった。いつの日か、僕には「死ぬまでにしたいことリスト」ができた。僕はその中に、いつかは自分の力で世界旅行をするという夢を入れた。世界は挑戦する人に開かれている、という漠然とした気持ちで、僕は自分の夢を計画し始めた。

(次回、世界旅行の話へ・・・)





■Writer&Photographer

Chibirock

■Age

33歳

■Profile

Sigur RosとBeirut巔頂のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

台湾の第一印象はひどいもんだった。

2003年、東南アジア縦断の旅を終えてバンコクから帰る際、一番安かった日本行きチケットが台湾に寄れるものだったので、とりあえず行ってみたはいいが…。台北に降り立ったのが旧正月のド真ん中。シャッター開いてる店と言えばファミマ、ドトール、洋服の青山…。あれ、もう日本帰ってきちゃった？デパ地下で食べたうどんは完全無味、銀行もやってないのでやむを得ず禁断のキャッシング。想像以上に寒く、暖房設備がない安宿で凍える日々。何も得るもの無く帰国した。

全ては旧正月のせいだと、3年後再訪を果たすも、一番心を動かされたのは、生まれて初めて食べたポンデリング…。いよいよ台湾を楽しむことは諦めようとするが、なぜなのどうして何かがかひっかかる。仕舞いには、前世が台湾人だったに違いないと思い込み、その謎を追求するために台湾再々訪することとなった。



独断で言い切る。台湾の最大の魅力は、自然でも食でもない、人だ。どこの馬の骨かもわからない初対面の人間に、自分の部屋を明け渡し、土日をつぶして案内役をかって出て、食費交通費おみやげ代全ての費用を払う。台湾人は当たり前のようにやるのだ、そういうことを。

台南在住の青年、阿銘と知り合ったのは某写真ポータルサイト。台南おいで！と誘われ行って

みれば、彼のガールフレンドの高級アパートに通され、好きなだけいていいと言う。ウツカリお言葉に甘えて2週間ほど滞在し、彼らの友達や家族や家族の友達の娘...かわるがわるこの日本の暇人につきあってくれて、夜市をめぐり、レアな路上結婚式に参列し、実家にお邪魔しアイスワインをご馳走になり、別れ際にはあったか〜いメッセージ入りのカードとお守りをもらい...。ウルルンに換算すると最低2週に及ぶであろう数々の好意に、どう感謝の意を伝えたらいいかわからなかったが、「全然いいって」と、彼らは最後の最後までサラっとしていた。

阿銘カップルが日本に遊びに来た際、渾身のおもてなしをする気満々だったのに、彼らはまたも、サラっとあたしの分まで払ってしまった。抗議しても耳を貸さない。行ってももてなされ、来てももてなされ、悶々とする無限ループから抜け出せない。

その他、旅の途中で親切にしてくれた人や、日本のためにお金を出してくれた見ず知らずの人...彼らの度肝を抜くような暖かさに打ち震えると同時に、自分の前世は台湾人だなんて二度と言うまいと誓った。



トルコでビールを

トルコでビールを

■Writer&Photographer

五十嵐 圭

■Age

35歳

■Profile

2011年4月に会社を辞めて半年間のバックパック旅行中

東南アジアを1周した後ヨーロッパ・中東あたりを水タバコを吸いながら

フラフラ移動しています

ブログ：つれづれ報告書

<http://turedure2006.blog.so-net.ne.jp/>

トルコを旅して、ケバブなどいろいろな料理を堪能した。そして、楽しみなのがビールだ。イスラム教の人口が多い国なので、どこでもアルコールを出している訳ではないが、パブなどでは皆が集まりビールなどのアルコールを楽しんでいる。

・エフェスビール:アルコール度数5%



トルコのビールで一番はエフェスビールだ。青いラベルの看板を街の商店やパブなどあちこちで見ることが出来る。もちろん「エフェス」の名前は、トルコにある古代都市エフェスから付けられている。エフェスビールがトルコの国民的ビールだ。

琥珀色の見た目軽そうなビール。飲み口は軽く感じるが、軽い苦味が後味として口に残る。しかし、嫌な感じが残るわけではなくスーッと抜ける苦味だ。トルコの塩味の濃い料理に合うビールの個性を感じさせる。

チャナッカレという都市のパブでエフェスビールを飲んでいたら、隣のおじさんがピーナッツ

をくれた。自分はトルコ語が出来ないため、会話はうまくできなかったが、感謝の気持ちは伝えることが出来た。言葉は通じないが、ビールという飲み物で交流することができ、何とも嬉しかった。いただいたピーナッツもとても塩味が濃く美味しい。ビールのおつまみには最適だ。ごちそうさまでした。

・エフェスダークビール:アルコール度数6.1%



エフェスの黒ビールで口にいれてすぐに苦味を感じる。しかしビールの漆黒のような黒さとは裏腹に、苦味は不思議なほど残らない。黒ビールの苦味が苦手な人でも美味しいと言ってもらえそうなビールだ。

ラベルのデザインも良い。黒と赤、そして黒豹がこちらに向かって歩いてくる。大人が嗜む飲み物。それがラベルデザインでも伝わって来てカッコイイ。エフェスビールが500mlで5トルコリラなのに対し、ダークは330mlで8トルコリラだった。値段も大人な感じだ。

・ツボルクスPECIAL:アルコール度数7.5%



デンマーク・コペンハーゲンのビールだ。しかし、ここトルコでもよく飲まれている。デンマークのビールというと、カールスバーグの方が日本では有名だが、トルコではツボルクだ。調べるとツボルクは、1970年にカールスバーグの子会社になっているとのこと。

とにかく強いビール。ビールの苦味と甘みが口の中に広がる。チーズをつまみにすると合うビールだ。ただ味が濃く強いので好き嫌いが分かれる。アルコール度数も高い。

イスタンブールで泊まったドミトリーのバーで、「Beer Pong」というゲームに参加した。向かい合ったテーブルの両端に、6個のコップを三角に配置する。そこにツボルクスPECIALを注ぐ

。2人1組となって、相手端のコップをめがけてピンポン球を投げ入れる。ビールの入ったコップにピンポン球が入ったら、入れられたチームはそのビールを飲まなくてはならない。交互に投げ合い全部のビールを飲ませた方が勝ちというゲームだ。負けたら全部飲むが、勝っても勝利の祝いで全部飲む。結局全部飲む事になるが、そんなことはどうでも良い。とにかく楽しいのだ。中国系の方とチームを組んだ。チーム名は「アジアン・センセーショナル」。4回戦ほどして全て勝利、みごと優勝することができた。しかし、次の日は二日酔いで、バス移動を予定していたが一日延期した。体調が復活したのはその日の夕方だった。

どこの国に行ってもその国を代表するビールがあることが多い。もちろんトルコではエフェスだ。今回訪れた都市のイスタンブール、パムッカレ、カッパドキア、チャナッカレ、どの都市でもエフェスの青い看板がありエフェスビールを飲むことができた。日本に比べるとパブで飲んでも結構安い。エフェスビールで4トルコリラ、だいたい200円で一杯飲める。だからといって二日酔いになるほど飲んではいけない。それは万国共通のお約束だ。



旅人からの伝言

特集

中南米

Brainiのアンケートで次に行きたい旅先の筆頭候補地である中南米。その南米について体験済みのバックパッカー達に綴ってもらった。



「金を出せ！USダラー、USダラー！！」



■Writer&Photographer

大谷浩則

■Age

28歳

■Profile

猪突猛進の超不器用旅人。

2009年4月から423日の海外放浪を実行。

来年再放浪計画中。

Blog:「ウィーリー 海外放浪・地球一周・地球探索 ～人生大満喫の旅～」

<http://ameblo.jp/hero23/>

深夜2時。辺りは真っ暗闇、夜行バスの検問。友人は検問の警官にナイフで脅され、お金を要求された。地元人には目もくれず、彼らのターゲットは我々アジア人だった。真夜中のこの行為、鳥肌が立ちっぱなしだった。今でも思い出すとぞっとする。

ヴェネズエラ。旅立つ前は絶対行かない！と決めていた。というのも、「警官が腐っていて脅される」「首都カラカスの治安が悪すぎる」「長距離バスの冷房が効きすぎて眠れない」「ATMで確実にスキミングされる」「闇レートが存在し、レートはまちまち」と、不安要素が非常に多かったからだ。

しかし、旅の途中ヴェネズエラの魅力を旅人から聞き、不安よりも好奇心が勝った。訪れることを決心したのだ。

長旅をしていると「珍事・ハプニング」の方が「観光要素・風景」よりも印象に残る。このヴェネズエラという国は特にそれが当てはまる。

ヴェネズエラに対して巨大な不安を持っていた私は、カラカスに着いた瞬間日本大使館を訪れた。そこで大使館員に言われたことは・・・「カラカスに5泊もするのですか！？今すぐこんな危ない街は出て下さい！なんで5泊もするのですか！！」とすごい剣幕で注意を受けた。いや怒ら

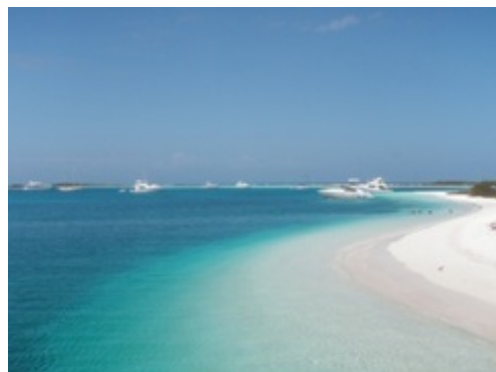
れた。・・・それだけ危険な街らしい。特に週末・夜半の旧市街では誘拐が多発していて、非常に危険ということだ。しかし、行ってしまった。週末のカラカス旧市街。恐る恐る。細心の注意が逆に不審者に思えるくらいに。

旧市街の中心ボリーバル広場では、市民がのほほんと散歩し、老人がハトに餌やりをしている。ファストレストランには若者が行き来している。至って普通の光景だった。とても恐れられている街とは思えなかった。路地には名物(?)大統領チャベスのグッズを売る露天商が多々。私はそこでチャベスの帽子を意気揚々と購入。もしこの帽子をかぶっていたらアメリカには入国できないだろうなと思いつつながら。

ヴェネズエラの通貨はボリーバル。この通貨を手に入れるのが一苦労だ。闇レートが存在し、銀行のレートとは倍くらい違うから驚きである。しかも100米ドル、50米ドルの高額紙幣の方がレートは良い。ホテルで「闇両替をしたいのだが・・・」と尋ねると「近くの〇〇レストランに行きな」とアドバイスを受け、〇〇レストランに。両替の旨を伝えると、お店の薄暗い裏部屋に連れていかれ、札束が積んである机の横で闇両替をする。レートを示されたが、高レートになるよう交渉した。何か悪行をされるんじゃないか?という恐怖もあったが無事に終了。そんなやりとりで、ボリーバルを手に入れたのだ。(カラカスよりもブラジル国境付近の方が更に高レートであることを後から知る。)

ヴェネズエラの夜行バスはとにかくエアコンが効きすぎていて寒い。窓に水滴ができるほどだ。(20度くらいに設定されている。外は35度前後)現地人はこの現状を知っている所以毛布持参で乗車する。私が「エアコンを緩めてくれ」と頼むも運転手は「このエアコン温度調整が出来ないんだ」と訳の分からないことを述べた。寒がりの私は真冬の格好で乗車し、検問の度に脱いだ。(運が悪いと1時間おきくらいに検問がある)警官が腐っていることは知っていたので現金を様々な場所に隠した。靴下の中、レグウォーマーの裏など。お札が湿り、臭ったのは言うまでもない。下着に隠す女性もいた。

観光要素ももちろん沢山ある。ヴェネズエラには多くのテーブルマウンテン、綺麗なカリブ海がある。自然にあふれており自然好きな私にはものすごく興味深い国なのだ。



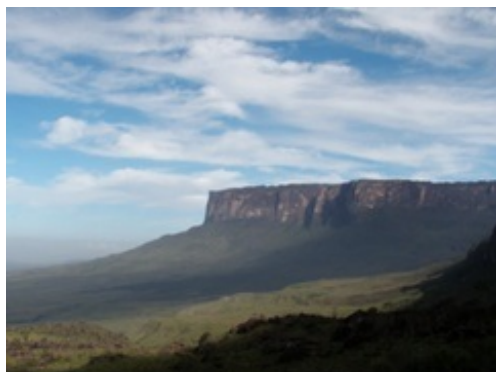
カラカスから小型旅客機で1時間ほど。カリブ海に浮かぶロス・ロケス諸島がある。ここは楽園だった。抜群の治安の良さに、どう表現したら良いか分からない青い海。白い砂浜に寝転がり

カリブ海の日差しを浴びる。最高のロケーションだ。特にカラカスで神経を使いすぎていたので解放感がなんとも言えない。様々な島に寄り、何度もシュノーケリングもしたが、のんびり青い海を堪能するだけでも価値はあると思う。

そして私のヴェネズエラ一番のハイライトはロライマ山トレッキングだ。5泊6日でロライマ山に登るのだ。恥ずかしながら6日間のトレッキングは初めてだった。下痢になりやすい私には川の水を飲む事が懸念事項だった。

そんな不安を吹き飛ばしたのがロライマ山から見る絶景。登山の達成感。断崖絶壁に座りテーブルマウンテンを見下ろす。異空間なその景色は忘れることができない。なんで自分がこんな場所に居るのだ？テーブルマウンテンのその神々しい姿を見るために、何度絶壁に向かった事やら。私はずっと山からの風景を眺めていた。ものすごい高揚感と共に。山頂にたどり着くまでに3日かかっていることも、感動を高める要素だった。

最終日出発点に戻った時に、思わず涙が出てしまった。今回の放浪で涙が出たのはこれが初めてかもしれない。ナルシスト的に言えば、ものすごい不安にかられていたトレッキングを無事終えれたこと。ロライマ山のその雄大な風景に触れたこと。そんな充実が入り混じっての涙だと思う。半端ない達成感だった。放浪前の自分だったら参加しなかつただろう。放浪中に芽生えた好奇心が私を動かしてくれた。



423日の海外放浪を終え振り返ると、ハイライトだったヴェネズエラ。思い出が多すぎて書き切れない。非日常が日常だった。

皆さまも期待と不安を持ってヴェネズエラを訪れて欲しい。ありきたりでない体験ができると思う。

中南米からの伝言

中南米からの伝言



■Writer&Photographer

youmetraveling

■Age

30歳

■Profile

20代最後の悪あがきということで、5年働いた会社を辞め
ずっといきたかった世界一周の始まりです!

旅の期間は、、、1年半くらいとして、留学もするしヨガもしたし。とにかく!ただの旅では終わらさないぞ!

アイアムトラベリング - 29からの世界あるき -

<http://youmetraveling.blog28.fc2.com/>

憧れだった世界一周に出発して早半年。約四ヶ月にわたる中南米16カ国の旅が終了し、現在アメリカはカリフォルニア。

初めての中南米という事もあって、出発前は治安や移動など心配な事がたくさんあったけど、中南米の旅を終えて思う事は、中南米はとても旅行がし易いという事。昔に比べ、旅のスタイルも変わり、ほとんどの人がラップトップやスマートフォンを持参している。またほとんどのホテルやゲストハウスにWi-Fiが完備されている事に驚いた。唯一無かったのはボリビアのウユニのホテルとホンジュラスのテグシカルパとグラシアスの安宿くらい。安宿もWi-Fi無しじゃ客も来ないだろう。お陰でネットに困る事は無かった。

さて旅のルートはというと、メキシコからスタートしキューバ、グアテマラ、ペルー、ボリビア、チリ、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、ブラジル、ベネズエラ、コロンビア、一度アメリカに行き、その後再度パナマ、コスタリカ、ニカラグア、ホンジュラス、グアテマラからアメリカへ。

四ヶ月と聞くと大半の人が短いと言うだろう。確かに短い。ただ旅のスタイルはそれぞれで、コスタリカ一カ国で一ヶ月かける人もいたし、二週間で南米をバタバタ旅行する人もいた。僕の

場合はちょうど良かった。見たいところもほぼ見れたし、体も壊さず、特に問題もなかった。

中南米で一番心配なのが治安。でも実際行ってみると、心配し過ぎたのが恥ずかしいくらい何ともなかった。どこも観光客は必ずいたし、危ないとされるクスコやボゴタを始め、どこにでもツーリストポリスがいた。彼らが実際助けてくれるかどうかは別にして、治安改善に取り組んでいるという証拠には違いない。

旅行がし易い理由は、バス網が相当発達してる事と、食事が美味しい事。物価に関しては、アジアに比べると数段高く自炊をしてもある程度はかかってしまう。

楽しみにしていたのはペルー。実は、数年前に別れた元カノを誘ってメキシコから旅をしていた。とは言うものの、金銭的な事もありブエノスアイレスで日本に帰っていった。あわよくば復縁したいという陰謀があったのだけれど.....今のところそううまくはいってない。ってそんな事はどうでもいいか。

というのも、なんとマチュピチュの頂上のマイナピチュで、周辺の観光客が全員注目する程の大げんかをしてしまった。水と食料をもってフラフラと探検に一人で行ってしまった事に相当腹をたてたらしい。僕とは別に韓国人の女の子と一緒にいたので、一人になるわけじゃないから大丈夫だろうと思い、僕は僕でふらっといってしまったのだ。挙げ句の果てにはアメリカ人が仲介する有様。でもそれは“大げんか”であって仲介も焼け石に水(笑) 収まる事なく下山する事に。下山中の状態は想像にお任せします。その時は全く笑えませんでした、全く。

伝言 1

“マチュピチュでケンカはやめましょう”って、そんな人なかなかいないだろうね。



それにしても、本当に行ってみないとわからないのが旅。予定なんてものは立てても、絶対に他に行きたい所が出てくるから変更する、でもどんな風にでもアレンジできるから楽しい。ちょっと時間をロスし過ぎたと思ったら、飛行機が便利で安い。ドル精算のサイトだと、より円高の恩恵を享受できる。

特に物価の高いブラジル。国が広いだけにバス移動も時間がかかる。GOL航空だと夜の時間帯にプロモーション価格が出てるので、それで買うとかなり安くなった。

チリのサンチャゴからアルゼンチンの(ワイン産地で有名な)メンドーサへは、バスで行こうとしたが、あいにくの雪で峠閉鎖のため、3日待ったものの行けなかった。時間もかなりロスしたので結局飛行機を使った。その時もウルグアイのPLUNA航空で約16000円くらいだった。バスよりは高いと思うけど、時間も短縮でき、ルートの再編に飛行機はとても便利。

伝言2

“タイムイズマネー。それ程高くない飛行機を使ってより多くの場所へ行こう”

オススメの国はニカラグア。特に期待もしてなかったし、何しろ何も知らなかったニカラグア。コロニアルな雰囲気が残るグラナダに四日程滞在したのだが、ものすごく居心地が良く、その上、気のせいか美人を見かけた。コスタリカから入ってくると、町の様子もなんだか急にアジアの田舎見たいになって、妙に落ち着く町だった。マナグアの治安が悪くニカラグアをスルーする人も多いらしいけど、グラナダは安全でアクセスも悪くない。

あと、国として一番問題がありそうなベネズエラ。首都カラカスを始め、ベネズエラ人の友人に聞くと、シウダーポリバルやマラカイポなんかの治安もかなり悪いそう。何といっても旅行者の間で有名なのが、悪名高きベネズエラ警察による検問。ある人は裸にされてチェックをされたり、財布からお金を抜かれたり。その実態はかなり醜いらしいのだ。

僕の場合、最初の検問は、いきなりのベネズエラ国境。ブラジル側の国境の町からベネズエラ国境までタクシーで行ったのだが、一緒に乗ったのがコロンビア人。ちょっと嫌な予感がした。その通り嫌な予感は当たった。

国境につくと、三、四人の警官が待ってましたとばかりにタクシーによって来た。（でた！これが噂の！）と思いタクシーを降り、検問デスクへ。ベネズエラのサンタエレナまで行くって言ったタクシーの運転手は、チッと舌打ちをして帰って行った。（おいおい、どこいくねん！）と思ったものの何かを察していたのだろう。

最初にコロンビア人検問が始まり、数分で個室へ連れて行かれた。ドアの隙間からチラッと内部を見ると、警官のボスと思われる人がいて、コロンビア人はというと、パンツ一丁にされてるではないか……（こりゃだめだ。噂どうり、僕もこの後パンツ姿か）と、途方に暮れたわけだが、待てども待てども出てこない。

一時間半待ったあげく、もう待てんと思ったので別の警官に説明しに行った。「チーノチーノ、お前一時間以上待ってるんじゃない？どうしたんだ？」と、噂のチーノ攻撃。チーノと言われるとなんとかしっくりこない僕は、「ハポネスハポネス！」と十回以上言いながら拙いスペイン語で会話を試みたところ、警官も「わかったわかったー。お前はハポネスなんだな、よしっじゃあ俺が荷物チェックしてやる」といって荷物をさらっとチェックしてくれた。そしてようやく無事国境通過。出だしで思った、こりゃ大変やベネズエラと。

伝言3

“やっぱり少しはスペイン語を話せるほうが良い。旅も楽しいし、ベネズエラ警官とも上手くやれる……かも。”

幸いその後荷物チェックの検問は一度もなく、パスポートチェックのみだった。

中南米は本当に見所も多い。そして日本人旅行者のほとんどがいい人だった。日本人宿も大都市には大体あったし、日本が恋しくなったら日本食レストランもたくさんあった。日本からは少し遠いけど、是非また行きたいと思う。



トホホな話

トホホな話

旅をしていると、日本ではとてもありえない事に遭遇したりする。

そして、時に泣き、怒り、落胆し、呆然とし、赤面し・・・。

そんな旅の猛者たちのトホホな話をTwitterで集めました。

<http://twitter.com/SakuraHostel>

今年7月にパリでiPhone強盗に遭ったことでしょう。ぼーっとiPhone持って立ってたら見事にかっさわれました。 ><

<http://twitter.com/Gemuo>

タイのスワンナプーム空港でパスポートを失くして、見つけてくれたスタッフに「マイペンライ」って言ったら、かなり食い気味に「お前が言うな！」って怒られたことでしょうか…。マイペンライって言えばだいたいの事は許してくれるってガイドブックに書いてあったのに…。

http://twitter.com/takec_mosa

国境に着いたら、パスポートが無い事に気付いた。乗って来たバスまで戻り、血眼になって探したものの見つからずリマまで戻りました。そしてリマへ向かうバス内でカジノでパスポートを預けていた事に気づき、カジノに行くと保管されてました。笑

<http://twitter.com/misakitanaka>

インドで Dengue 熱 かったことかな(´・_・まじで死にかけましたが、病気になったからこそその出会いや経験もありました。まじで死にかけましたが、病気になったからこそその出会いや経験もありました

<http://twitter.com/daliwatch>

フィリピンで50kgの米袋を現地の女の人が頭に乘せて運んでいたの、自分もできると根拠のない自信を持って臨んだら、首の筋を伸ばしてしまったことですねえ。。。1週間以上痛みが続きました・・・

<http://twitter.com/amdathlon0816>

成田でユナイテッドの飛行機のる直前、独自の荷物チェックも終わり、乗る一歩前で何故かセキュリティに『ちょっといいですか？きてください』と言われ、色々根掘り葉掘り事情聴取された。悪いこと何もしてないのに...相当格好が怪しかったのか、日本で出鼻を挫かれた...。特に変な格好ではなく、キャップに黒のカットソー、黒のズボンでしたね...髭&日焼けしてました。何故か

行き先の香港でも市場を散歩してる時地元の警察官3人に囲まれて職質&ボディチェックとIDチェックされましたけど...(笑)普段は職質なんてされないのに(涙)

自炊派の手料理

自炊派の手料理（おいしいお手軽リゾット）

旅に出たら現地の料理を食すに限る。でも物価の高い街での長めの滞在となると、さすがに外食ばかりはフトコロに堪える。そんな時は自炊。簡単で安くて美味しい自炊派の手料理をご紹介します。

★ おいしいお手軽リゾット 四人分



外食ばかりだと、国によっては脂っこくて胃がもたれがち。そんな時、余った食材で簡単かつお腹にやさしいリゾットはどうですか？



材料

- お米・・・・・・・・・・2合（300g）
- ソーセージ・・・・・・・・2本
- マッシュルーム・・・・10個
- キャベツ・・・・・・・・3枚くらい
- チキンブイヨン・・・・1個
- 油・・・・・・・・・・少々
- 白ワイン・・・・・・・・大さじ三杯
- 水・・・・・・・・・・1200CC
- 塩&胡椒・・・・・・・・少々

（中に入れる食材はなんでもOK！！）

作り方

- ①ソーセージ、マッシュルーム、キャベツをスライス。

- ②鍋に油を入れて、温まってきたらソーセージ、マッシュルーム、キャベツを炒める。
- ③しんなりしてきたら、白ワインを入れ、アルコールがとんだところでお米は洗わないまま投入。
(お米は洗うと水分を含んでしまい、味が浸透しづらくなるのでそのまま使うのをお勧めします。)
- ④お米が半透明になってきたら、水とチキンブイヨンを入れます。
(できれば、水を沸かしてチキンブイオンを溶かしておく会更好)
- ⑤沸騰したら、弱火にして焦げないように時々混ぜながら10分~15分くらい待ちます。
- ⑥お米に少し芯が残るアルデンテの状態最後に塩&胡椒で味を整えて完成!

鍋ひとつで意外と早く作れるので、おすすめです!

魚や海老を入れて海鮮リゾット。チーズを入れてチーズリゾット。

一度作り方を覚えれば、食材を変えるだけで料理の幅が広がりますよ。

世界



俺たちパプアニューギニア
のゴロカに住む民族。
ココらへんは少数民族
がとても多くて
何族か把握されて
ないんだ。
ま、ダンス見せて
やるから
遊びに
来いや。

わたくし
エチピア
のムルシ族。
15歳くらいに
この唇にある
デヴィニヤという
皿を入れるのよ。
もちろん皿が大きい方が
美人なのよ。美人でしょ？

流儀のスタイル

■ Photographer
Sayaka

100カ国訪問を
目指し、世界の秘境、
民族、珈琲を求めて女一人旅
現在61カ国「WORLD JOURNEY」
<http://ameblo.jp/sayaka821/>



月餅地獄《中国・広州編》



■Writer&Photographer

Chibirock

■Age

33歳

■Profile

Sigur RosとBeirut最頂のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

台湾でぬくぬくと甘やかされた後、香港で友人と合流。マカオ行くぞー！と意気込んだはいいが、中国ビザ申請のためパスポートを旅行会社に預けていたため、香港の外に出られないということに、フェリーのチケットを買った直後に気づくというマヌケをかました。友人に申し訳ないという気持ちと、今後、一人旅なんてやっていけるのだろうかという不安で深刻に落ち込んだが、（個人的には）香港最強の観光スポット、萬佛寺に友人も満足してくれたので、まあよしと、しておく。



さ、とゆことで、いよいよ大陸へ。まずは、友人の中国人、サリーちゃんに会いに、香港から小一時間で到着する広州へ向かうです。

サリーちゃんとは、桂林近くの小さな村、陽朔（ヤンシュオ）で知り合ってから10年。SARSなんかの影響でガイドの仕事がなくなり、広州で働き始めたと思ったら、突然結婚して子供も作

った。よりによって広州か…。あの殺伐としたデカイ街に行くのは3回目だけど、どうも好きになれない。

広州に寄るよ、と電話をすると、5年ぶり！とすごい喜んでくれたけど、忙しいので旦那を迎えによこすとのこと。てっきり乳飲み子の相手で手が離せないものだと思ってたが違った。

日本における、バレンタイン・クリスマスのカオス如きの、中秋の月餅地獄！今の時期、台湾も香港も中国も、どこを見回しても月餅。人が口を開けば月餅。寝ても覚めても月餅。とりあえずこの時期は、月餅を始めとするギフト商戦がそこらじゅうで盛り上がってるわけです。

彼女は月餅ガールとして、近所のバカでかいスーパーで期間限定で働いてる真っ最中。毎日13、4時間、期間中休みなしのハードワークでへとへと真っ最中。11時に店が終わり、品出し掃除シフト管理が終わり次第帰宅で、昨日なぞは帰ってきたの3時過ぎ。ごめん。さすがに先に寝ました。

さ来週には、仕事終えて桂林へ引っ越すことだったので、もうちょい時期ずれてればまた、陽朔で会えたのにとっても残念。ま、地獄に真っ最中の彼女と会えて、一緒にご飯食べれてしゃべれて嬉しかった。陽朔での再会を約束して、しばしのバイバイ。旦那と仲良くね！

香港で食べた、冷やし月餅は、どこの店でもこれイチオシなので、買った時はめっちゃ嬉しかったのに、半分でギブ。月餅がちょっとだけ雪見大福に傾いて、なんかモソモソ。

香港人の友達に聞いたら、「こんなのもらって嬉しい人そんないないよ」あんなに全身全霊で売り出してるのに…？

気がすんだのでいいけど、腑に落ちない。

世界の車内にて《中国・広州編》

世界の車内にて《中国・広州編》



中国の電車、頼んでもないのにBGMを結構な音量で流してくれるサービスがある。今は中国語版の世界に一つだけの花、だっけ？あれが耳栓をつきぬけてきているところ。止むことのない、怒号にしか聞こえないおしゃべりとともに。日本とアメリカでは、この耳栓だいぶ役に立ったんだけど、おかしいな。でもなかなか快適。寝台列車。



バスなり電車なりの車窓から見える風景って、すごく好きなんだけど、一生交わることのない人が、今までもこれからもあそこで生きてる。というごく当たり前の事実が、旅テンション上げるんだなあ。

もらいものの、サンマの缶詰、食べようと思ったら箸がない。ドライマンゴー、超マズい。結果、りんご2つとスニッカーズのみで25時間過ごす惨事。誰かなんかしてくれないかなあ。

サリーちゃんの旦那は今日も駅まで送ってくれたのだが、突然、別れ際に2元ちょうだい、と手を出された。あ、きた。また。送ってくれたんだし、そんな金額、出すのはまったく構わない。しかしモヤっとする。台湾、香港との差。そして日本との差。同じ人間として出会ったのに、いつも面食らうこの「差」を感じる瞬間。

ひっきりなしに鳴る大都会のイントロみたいな爆音の着信音にも、内蔵出るんじゃ？と心配になるほどエンドレスに痰を吐き続ける音には慣れたけど、こゆのはいつもモヤる。考えること自体無意味。いやなら関わらなきゃいいだけ。そんな風に割り切れるようにいつかなれるんだろうか、ってモヤモヤを、また着信音が引き裂く。

もうどうでもいいや。

昆明着、23時間前のたわごと。

爽やかにカオス、昆明《中国・昆明編》



昆明着。中国ってのはご存知の通り何でもでかいから、やっぱり駅もでかくて、宿のお迎えの人に会えず、しょうがないから徒歩で行くことにするも、地図で見る以上に街がでかいから相当時間かかった。

やっとこさ着いたバックパッカー向けの宿、Humpは、Wi-Fiついて心地よいカフェもあり、ま一居心地はよいが、でかいだけあってビジネスライク。さ、ちょっとお散歩行きましょうか。

まず宿の隣のゲーセンへ。高校生の頃からずっと、感覚だけで数々の猛者を倒してきた鉄拳プレイヤーのわたしが素通りするわけもない。金を入れてもうんともすんとも言わないのでクレームをつけ、店の兄ちゃんに直させたものの、今度はボタンが1つ反応しない。意地でクリアーし、さっぱりして散策開始。

ベトナムのごとくバイクが多いが、全く音がしない不思議。皆エンブレで走ってんのかと思ったの。ガソリン節約とか、歩道走るためとかせせこましい理由で。したらこれみんな、電気バイクなんだって！なんかススんでんじゃん、せせこましいとか言ってすみません。ほんとに音しないから、後ろから突っ込まれても全く気付きません。要注意。

バスに乗ってみれば、ほんの近距離しか走らないのにテレビなんかついちゃって、コントなんかやっちゃって。中国人腹抱えて大爆笑。あたしもチャイニーズジョークで笑える日が来るんだろうか。まあ来なくてもいいや。

街の中心地へ。意外にも、ZARAなんつう（多分本物の）オシャレブティックも並び、スキニージーンズで闊歩するオシャレガールの姿も珍しくない。そして発見したのは、ワニのマークでお馴染みの、「ラコス...」ではなく、香港で多数の店舗を抱える「クロコダイ...」でもなく、「アルマジロ」。どこまで続くのこの爬虫類シリーズ。



ドミが同じ部屋の中国人、スティーブンに連れてきてもらったのは火鍋の店。好きな具選んでお金払うと、でかい中華鍋にこんがり炒まった料理が…。火鍋ってもっと水っぽいもの想像してたんだけど、中国の火鍋ってどこで食べても大体こういうのだった。普通に美味しかったんだが、何が一番びっくりしたって、中国人が「いらっしゃいませ」って言うってことだよ！「足元にお気を付けください」とまで。あまりにサービスが良いからメイド喫茶かと思った！

馬鹿でかい中国の、ばかでかい昆明の、ほんの一部の風景をお届けしました。

旅の便利グッズ

旅の便利グッズ

旅に持って歩く基本的なグッズとは別に、意外と役立つとか、この地域に行くなら便利など、人によって便利なグッズを知ってたりする。これから旅にでる人はご参考までに。（投稿によりますので、かなりな個人的見解になってます）

■「無印良品ミニラーメン」



海外に行く時は醤油を持っていけ、と言われていましたが最近では液体の持ち出しも厳しくなりました。また、カップラーメンもカバンにつめて長旅をすると案外つぶれやすく、容器が破損してしまうことも。しかも国によっては都合よくお湯が手に入るとは限りません。このミニラーメンはスープやかやくが別についているわけでもなく、麺単体をカップに入れてお湯をそそぐタイプなので、カバンにしまいやすいです。また、多少つぶれても麺が短くなるだけで食べるのには支障がなく、お湯が手に入らない場合はそのままスナックとして食べる事ができます（ベビースターの様な味です）。4つで105円とリーズナブルな上、チキン味や焦がし醤油味などバリエーションも豊かです。

海外に行く時は必ず持っていきますが、ヨーロッパでもアフリカでも手付かずで帰る、ということはありませんでした。やはり食の安全は基本だと思います。

情報提供者：はるの鈴音

■セームタオル



小さい軽い乾きやすい！もう他のタオル使えません

シャワー上がりですね。他のタオルを持っていく必要がない位使えます。ただ肌触りが。という

ご意見。

情報提供者：

<http://twitter.com/amdathlon0816>

<http://twitter.com/hideto328>

<http://twitter.com/SKRMX>



アイランド



イタリア



オーストリア



クロアチア

P

世界のパーキングメーター



イギリス



エストニア



オランダ



シリア



ベルギー



スペイン



チェコ



ドイツ



マレーシア



モロッコ



フランス



ポルトガル



スウェーデン



スイス

作者・情報提供者一覧

作者・情報提供者一覧

年末年始弾丸バックパッカー 本文&写真

ワールドハッカー

元バックパッカーで、現在は職業ハッカー。ブログ「World Hacks!」にて、海外旅行関連の情報を毎日発信しています。

<http://bit.ly/WorldHacks>

年末年始弾丸バックパッカー 情報提供&写真

旅人からの伝言 「特集 中南米」 情報提供&写真

大谷浩則

猪突猛進の超不器用旅人。2009年4月から423日の海外放浪を実行。来年再放浪計画中。

Blog: 「ウィーリー 海外放浪・地球一周・地球探索 ～人生大満喫の旅～」

<http://ameblo.jp/hero23/>

年末年始弾丸バックパッカー 情報提供&写真

おーたゆーすけ

リーマンパッカー。訪問歴は、英国領香港、ケニア（5回）、タンザニア（4回）、ウガンダ、エジプト、マダガスカル、韓国（2回）、タイ（2回）、ミャンマー（2回）、パキスタン、ウズベキスタン、イラン（2回）

年末年始弾丸バックパッカー 情報提供&写真

タビロック

2010年2月に、地元栃木を出発！ただいま世界一周中の夫婦です。

<http://ameblo.jp/gooooooska>

遺したいモノ、コト マイ世界遺産 本文&写真

岡部能直

世界の絶景や世界遺産を中心に旅を続ける旅人。七大陸制覇の経験を生かし、世界各国についての旅コラムを執筆。『世界のどこかで何か叫ぶ・・・かもしれない。』

<http://ameblo.jp/ok-be/>

遺したいモノ、コト マイ世界遺産 本文&写真

兼清俊太郎

協賛金を募りながらアジアを旅する天然パーマな22歳の大学生。一昨年は100冊読書+書評

、昨年はロンドンへ語学留学、今年はアジア放浪の旅。来年は大学生活最後、留学と旅をもとにした本を出版したいけど未定。

<http://ameblo.jp/shun-travel/>

遺したいモノ、コト マイ世界遺産 本文&写真

96 Happy World Journey ゆーじ & ありさ

2010年3月から夫婦で世界一周へ。ホームページでは旅の日記、写真、動画、特集ページなどを通して、地球の美しさと旅のワクワクを発信中。96Happy World Journey

<http://96happyworldjourney.web.fc2.com/>

情熱さえあれば不可能なことはない 本文&写真

ジョン・サンゲン

(芹川彩音／増山知香 編集・翻訳)

1984年ソウル出身。13歳の時に一人で韓国を旅し、その10年後には80万ウォン(約64,000円)だけを持って世界30カ国にも及ぶ世界旅行を敢行。その体験を綴った「80万ウォンで世界旅行」は発行部数4万を超えた。現在は日本で留学中。

<http://www.sanggen.com/>

Chibirockの旅はくせもの 本文&写真

アジア漂流日記 本文&写真

Chibirock

Sigur RosとBeirut鼻唄のメタル好きバックパッカー。チベット越えてインドで太って台湾の農家で大豆を選り分けたり。最近結婚したが放浪やめる気毛頭無し。

<http://blog.chibirock.net/>

HANGOVER in the WORLD ミャンマービール 本文&写真

五十嵐圭

2011年4月に会社を辞めて半年間のバックパック旅行中。

初めての一人旅に戸惑いながら東南アジアを中心にフラフラと移動しています。

ブログ：つれづれ報告書

<http://turedure2006.blog.so-net.ne.jp/>

旅人からの伝言 「特集 中南米」 本文&写真

youmetraveling

20代最後の悪あがきということで、5年働いた会社を辞めずっといきたかった世界一周の始まりです!

旅の期間は、、、1年半くらいとして、留学もするしヨガもしたし。とにかく！ただの旅では終わらさないぞ！

アイアムトラベリング - 29からの世界あるき -

<http://youmetraveling.blog28.fc2.com/>

自炊派の手料理 本文&写真

谷津 達観(やつ たっかん)

料理一筋！懐石料理で腕を磨き、中華料理店の店長を経て、世界一周の旅に！

現在、夫婦で旅に出て9ヶ月。一年の予定で現地の食材や料理を学びながら旅をしています。食べるのも、作るのも大好き！

「家から徒歩1年☆たっかんとじんみ2人世界一周」

<http://ameblo.jp/worldjourney2010/>

表紙Photo

世界マイノリティ流儀

Sayaka

100カ国訪問を目指し、世界の秘境、民族、珈琲を求めて女一人旅。現在61カ国。

「WORLD JOURNEY」<http://ameblo.jp/sayaka821/>

協力

向井通浩

JAPAN BACKPACKERS LINK 代表・運営管理者。「ハニートラップ研究所」所長。タイマッサージ依存症。ホワイト餃子。

<http://backpacker-link.com>

編集後記

今回「年末年始弾丸バックパッカー」に記事を投稿してくれた、タビロックさんが亡くなりました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

次号予告（12月25日発行予定）

- テーマ「GAP」
- 旅で使えるデジタルアプリ
- 情熱さえあれば不可能なことはない
- HANGOVER in the WORLD
- Chibirockの旅はくせもの
- 旅人からの伝言「特集アフリカ」
- トホホな話
- 旅の便利グッズ
- 自炊派の手料理
- アジア漂流日記
- 世界のコレクション
- 旅先の変な日本語
- 世界マイノリティ流儀

他にも連載企画を予定しております。

また連載企画も募集しておりますので、募集要項をお読みになってドシドシお寄せください。

記事と情報および写真の募集要項

記事と情報および写真の募集要項

次回のBraliの発行予定は12月25日です。

下記の記事や情報をお気軽にお寄せください。ご応募いただきました中から厳選させていただきます。

★記事および情報

■テーマ「GAP」

世界は格差問題で大荒れですが、「格差」「ずれ」「違い」など、旅先で感じたまたは帰ってきて感じた「GAP」をお伝え下さい。自分の予測または予想してた世界や地域と実際とのGAP、海外で見たその国内のGAP、日本と比較したGAP、自分と比較したGAPなど。

→1500字から2000字程度

■旅で使えるデジタルアプリ →旅で役に立ったアプリを教えてください。

■HANGOVER in the WORLD →旅先での酒や酒場にまつわるショートコラムをお待ちしています。

■旅人からの伝言 特集アフリカ

→1500字から2000字程度

■旅の便利グッズ →旅で便利だったグッズを教えてください。

■変な日本語→海外でよく目にする「変な日本語」。写真とどこで撮影したかを教えてください。

★写真

■Brali表紙用写真

★企画

■連載企画の持ち込み

3回以上の連載企画をお寄せください。旅に通ずればジャンルは問いません。

紀行、エッセイ、コラム、ポエム、短文、座談会、インタビューなど。

→1回の投稿につき2000字以内。

記事投稿および投稿に関するご質問はメールにてお願いします。

bralimagazine@gmail.com